

# News Letter

## Graduate School of Education

巻頭言	矢野 智司	副研究科長	②
研究ノート			③
教員から	梅村 高太郎	臨床心理学講座 講師	
院生から	中来田 敦美	修士課程1年	
社会人院生から	芝 涼香	修士課程2年	
留学生から	Claudia Araya	修士課程2年	
活動報告			⑤
臨床教育実践研究センターから			
	岡野 憲一郎	連携教育学講座(附属臨床教育実践研究センター)教授 附属臨床教育実践研究センター長	
教育実践コラボレーション・センターから			
	桑原 知子	臨床心理学講座 教授 教育実践コラボレーション・センター長	
グローバル教育展開オフィスから			
	高山 敬太	グローバル教育展開オフィス 室長	
トピックス			⑥
「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と 展開プロジェクト・支援モデル2			
	鈴木 晶子	教育・人間科学講座 教授	
E.FORUMの取り組み			⑦
	西岡 加名恵	教育・人間科学講座 教授	
図書室から	美濃部 朋子	図書掛長	⑦
令和元年度教育学研究科長賞			⑧
	平岡 大樹	博士後期課程3年	
	松永 倫子	博士後期課程2年	
オープンキャンパス2019 大学院・学部学士入学 入試説明会			⑨
諸記録			⑩
1.主な出来事(H31.4.1～R1.10.31)			
2.人事異動(R1.5.1～R1.11.30)			
3.外部資金受入れ(R元年度)			
4.教育学研究科・教育学部基金			
諸報			⑫
新任教員紹介			
名誉教授訃報			



### 京都大学 大学院教育学研究科ロゴマーク

このロゴマークは、京都大学学術情報メディアセンターの客員教授・奥村昭夫先生のデザインです。奥村先生は、ロート製薬、グリコ、牛乳石鹸などのロゴマークやパッケージなどを手がけた著名グラフィックデザイナーです。本研究科・学部の「育ち」「つながり」「先端」といったキーコンセプトをもとに、教育学部本館の正面玄関を見守るスノキの葉をモチーフとし、緑のグラデーションで成長の変化、中央の空間でこれから生まれてくるものを表わし、全体として両手で優しく包み込むイメージのデザインとなっています。

## 教育学部創立70周年に際して 考えたこと



副研究科長 矢野 智司

経済のグローバル化による生活の変容、AIをはじめ科学技術の発展による産業構造の変化、そして地球規模での環境破壊、……人類史がいろいろな意味において臨界期に直面していることはまちがいないことでしょう。これからの選択一つ一つが、後戻りのできない人類の未来を決定してしまう可能性があります。これから「人間」という在り方が、これまでとは異なるものへと形を変えていくことはまちがいません。そのような「人間」をどのような問い方で問うのか、その問い方はいくつも考えられるでしょうが、いま私たちが直面している課題にふさわしい問い方の一つは、画家ゴーギャンが絵のタイトルにした、「私たちはどこから来たのか 私たちは何者か 私たちはどこへ行くのか」というものです。

ゴーギャンが、なぜこのような謎めいた問い方をしたのかは、ここでの問題ではありません。ここでは問いの作られ方に注目したいと思います。この問いの特徴は、3つの問いがそれぞれに独立していながら、一つの全体性を構成しているところにあります。最初の問い「私たちはどこから来たのか」は2番目の問い「私たちは何者か」の答えを準備するものであるように、3番目の問いに答えるためには、最初の問いと2番目の問いへの答えを必要とします。そのような回路を経ることなしに、最初から3番目の問い「私たちはどこへ行くのか」に答えることはできないのです。そのことは最初の問いから3番目の問いに一直線に答えることができないことを意味しています。

それはまた「私たちはどこから来たのか」という私たちの起源あるいは歴史を問う問いへの回答が、そのまま私たちの未来の行き先を決定するものではないということです。「どこから来たのか」への回答が、直接に「どこへ行くのか」への答えを与えてくれるわけではありません。「私たちは何者か」という問いが中間に挟まることで、私たちの自己理解が未来へとつながるのです。3つの問いは相互に影響を与えあい、動的に変容しながら、互いの回答の内容自体を刻々と新たなものに昇進していくような仕掛けになっています。このようにダイナミズム自体を内蔵することで、この問いは「人

間」を問う問いとして、さらに「私たち」の在り方を希求する主体的な問いとして、閉じることのない優れた全体性を有しているといえます。

しかしこの問いが教育学的思考にとってとりわけ重要なのは、3番目の問いが「私たちはどこへ行くのか?」という未来とつながる開いた問いを含んでいることです。20世紀のように、啓蒙のプロジェクトとして、教育を新しい人類社会の建設のための優れた手段と見なすことはもはやできないにしても、教育が未来の社会の形成と関わっていることはまちがいません。もし被教育者と社会の現在がそのまま肯定されるのであるならば、教育という関わりは必要ないでしょう。教育という関わりは、被教育者と社会の現在の状態への否定から始まります。そしてそのような現在の在り方に否定を見いだす力は、私たちの未来への関係の仕方に由来します。「私たちはどこへ行くのか」と未来＝未知に向けて問うことが、教育学的思考を駆動させるのです。この問いかけなしに教育を捉えることは、教育を現状に適応させるための活動に縮減させてしまうことになるでしょう。教育とは、既存の制度に依拠しつつも、その具体的成果がわからないほどのタイムラグをもちますが、地道で着実なそれでいて時代批判的な歴史創造の企てです。

この臨界期の世界に誕生した人間＝私たちは、どのような社会＝世界を生きていくべきでしょうか。教育については、政治学的・経済学的に考えることも、あるいは倫理的・哲学的に考えることも可能でしょう。ですがこのような諸学の立場にたいして、教育学的思考に固有性があるとしたら、それは新たにこの世界に誕生する生命も含めた「私たち」自身の未来と結びつけて、成長する個人の具体的な生の課題に寄り添いつつ、未来の社会の在るべき姿を見据える、という二重性において教育を捉えるところにあると考えます。創立70年を迎えた教育学部は、「私たちはどこから来たのか 私たちは何者か 私たちはどこへ行くのか」という問いを心にとどめ、長期の視野をもってこれからの教育における人類史的使命とは何かを提示し、歴史創造に参与しなくてはならないのだと考えます。

## 教員から

臨床心理学講座  
講師

梅村 高太郎



## 家に表れるところ

私がここ数年手掛けている研究で用いている方法に、“家屋画”というものがある。家屋画というのは、その名の通り、家の絵を描いてもらう心理検査で、描かれた絵から描き手の無意識的な心理的傾向を読み取るようとする投射描画法という手法の一つである。同じ系統に属する心理検査としては、木の絵を描いてもらうバウム・テストがもっとも有名かと思われるが、この家屋画も負けず劣らずメジャーな画題である。

描かれる絵には、ある程度文化的な影響がみられるものではあるが、実際にその描き手がどんな家に住んでいるかということと直接関係するものではない。例えば、現代の日本では、マンションやアパート等の集合住宅にお住まいの方も多いが、そうした集合住宅を描く人はほとんどいないし、現実にはほとんど目にする事のない煙突が描かれることも多い。この課題で問われているのは、あくまでその人の持つ家の“イメージ”なのであり、だからこそ、そこにその人の人となりが表れると考えられて

いる。

こうした手法を用いて研究を行っていることもあって、私は道すがら気になる家があると、足を止めてついじろじろと眺め、“分析”してしまうことがある。塀に囲まれ、ドアも窓も一見どこにあるかわからないような家もある一方で、遮蔽物のたぐいが一切なく、ガラスがふんだんに使われた家もある。また、全体的にはオープンな印象を受けるものの、窓の位置・材質が工夫されていたり、植栽がうまく使われていたりして、プライバシーが絶妙に確保されている家もある。

もちろん先ほど述べたように、実際の家と家屋画とは直接関連するものではないけれども、こうした家屋のつくりから受ける「openness（開けっぴろげさ）」と「closedness（とっつきにくさ）」にも、家主の内と外をめぐり意識の一端がうかがえるように思われて、おもしろい。

## 院生から

## カレーの魔力、教育の魅力

私の友人に、無類のカレー好きがいる。彼女によれば、カレーとは、身近なようで掴みどころのない、魅力的な食べ物であるそうだ。曰く、同じ「カレー」と名のつく食べ物であっても、具材もルーもバラバラで、それぞれに全く別物である。それでいて、「これは『カレー』である」と感じさせる〈何か〉がどの料理にも共通しており——たとえばスパイスやハーブの風味とか——、そうであるからこそ面白いのだと言う。

なるほど、そう言われると、カレーとは奥の深い食べ物である。しかも彼女の場合、「カレー」と名のつくものは須らく好きであったが、世の中にはそうでない人も多い。辛いカレーは食べられない、この具材が入っていないと嫌だ……と、細かく見ていけば、様々な嗜好が存在する。そのような人が店で「カレー」と注文しても、求めた「カレー」は出てこないかもしれない。カレーという料理は、こうした複雑さも有している。

彼女の話聞いた私は、このような特徴は、「教育」

についてもあてはまるのではないかと感じた。つまり、「教育」に関して、これを提供されたいと考える人が、皆同じような「教育」を要求しているとは限らない。そうであるならば、社会が「教育」に求めるものについて語り直すことを通じて、「教育」のゴールを同定するための手段が開発される必要があるのではないかと。それぞれの店で提供される「カレー」の味が、言葉で語られていれば、各人が自分にとっての「美味しいカレー」を追求しやすくなることと同じである。

大学で学ぶ前の——さらに言えば、教育方法学について知る前の私は、彼女の話聞いても、「そうか、カレーって面白いな」という程度の感想しか抱けなかったであろう。どんなことでも「教育」に引きつけて考えてしまうのは、現在の私が抱える悪癖かもしれないが、それほどまでに自身を夢中にさせてくれるものに出会えてよかったと感じている。

修士課程1年

中来田 敦美

### 社会人院生 から

修士課程2年  
芝 涼香



## 社会の中で美術館ができること

10代のある日、私は大英博物館にいて、自分の知らない世界にワクワクしていた。エジプトのミイラ、パルテノン神殿の彫刻、アッシリアの神像…「ミュージアムは多くの驚き(wonder)に溢れてる！」背景に帝国の歴史があるものの、人間の好奇心がこのミュージアムを創り上げたこと、そしてミュージアムが現代の我々の好奇心を刺激してやまない現象に気づいてから、私はその建物がただの「過去の冷蔵庫」ではなく、大きな可能性を持っている別の何かだと感じ始めた。

美術史を専攻した後、ミュージアムをより広く捉えるため、生涯教育学講座に入学。社会教育施設として日本の博物館は何を残し、伝えてきたのか、主に沖縄でフィールド研究を行った。ご縁あって、研究コースの途中で就職し、現在美術館で学芸員として働いている。

美術館の仕事は優雅なように見えて、思ったよりもハードだ。というのも今、地方の美術館が続々とリニューアルや改修工事の時期を迎えているから。それは“社会

の中での美術館”を問い直すことを意味する。美術館は社会の中で何をできるのだろうか。いやいや、そもそも「中の人たち」だけ、美術館の中だけで考えて、答えが出るものなのか。

ここ数年、教育機関・福祉施設との連携や館外のアートプロジェクトを行う中で見えてきたキーワードは「人」だ。学芸員は思わず作品をまず中心に据えてしまうが、作品の周辺で起こっていることも実は面白い。自分の知らない作品や作家の世界に感動する人もいれば、イベントを通し今まで出会ったことのない人と話すことで、自らが気づいていなかった価値観に気づく人もいる。美術館は様々な人が集まり、交流し、新たな価値観を生み出す可能性に満ちている。

今、私はありがたいことに佐野先生のご指導や家族の支えのおかげで、実務での発見を研究に生かせる環境にある。教育学研究科の所属として、今後も人を中心とした研究を進めていきたい。

### 留学生から

修士課程2年  
Claudia Araya



## A Research Journey from Costa Rica to Japan

While working on my undergraduate thesis I had already decided that I wanted to get a master's degree in Cognitive Psychology and that I would like to do it in Asia. I found that Saito lab at the Graduate School of Education of Kyoto University was the best option for my interests and goals, so I decided to apply. Fortunately, this is my second year in Kyoto and the experience as a student conducting research in Costa Rica and in Japan has been very different, both with its ups and downs, mainly due to cultural and budget differences. Personally, I have enjoyed both in different ways and I would like to share my experience with you.

My undergraduate thesis aimed to find if working memory and fluid intelligence are able to predict the scores on the University entrance examination. For my master's research, I kept studying working memory but in relation to long-term memory and language acquisition. Both are very different studies with different goals, but my interest in working memory allowed me to start my research journey from Costa Rica to Japan.

During this journey I have encountered two surprising differences. The first one is that, in Costa Rica the environment was not very formal. Even though the Institute of Psychological Research of the University of Costa Rica is quite a large institute, researchers and students often become very close.

Yet, in Japan, relationships seem to maintain the age and status boundaries over time, sustaining formal ways of speaking even though the relationship becomes somehow closer. The second big difference is the comfort of doing research in Kyoto University. One of the biggest struggles while conducting research in Costa Rica was the lack of budget, thus, it was a very good surprise when I found out all the resources and comforts that students at Kyoto University have, which definitely makes research smoother.

The change of environment that came with moving to Japan has been challenging but it is also one of the most interesting and enjoyable parts of this journey. Understanding and adapting has been an important and enriching part of this new experience which has helped me become more independent and creative; hopefully this can aid my goal of becoming a researcher. I believe the same can happen to other students who decide to pursue their studies in a different country.

I hope that my experience and studies at Kyoto University can help as a bridge between both countries to conduct collaborating and cross-cultural research. If you are interested in visiting the University of Costa Rica or are interested in knowing more about it, do not hesitate to contact me.

## 附属臨床教育実践研究センターから

### 臨床教育実践研究センターの活動

連携教育学講座(附属臨床教育実践研究センター)教授/附属臨床教育実践研究センター長 岡野 憲一郎



今年で開設23年目となる臨床教育実践研究センターは、開設以来一貫して、市民に開かれた心理教育相談室での心理臨床実践を中心に活動しています。心理臨床実践活動においては、スタッフ一人ひとりが目の前にいる来談者に真摯に向き合いながら、同時に、心理教育相談室という場のあり方についても細やかに考えながら、心理教育相談室での相談活動にあたっています。また、そうした臨床実践に根差した知を社会に還元する活動として、毎年「リカレント教育講座」と「公開講座」を開催しています。

今年度も8月に、第23回リカレント教育講座を開催いたしました。今年度は「多職種・多機関の連携」をテーマとし、シンポジウムでは、学校現場での臨床活動に造詣の深い2名の先生方をシンポジストに迎え、多角的な視点からお話いただきました。当日は、学校教諭や臨床心理士など、約80名の方々にご参加いただき、活発な議論がなされました。

また10月より4カ月間、イタリア・カリアリ大学のステファノ・カルタ先生に客員教授としてお越しいただいています。ユング派の心理療法につ

いてだけでなく、近年研究されている、脳科学や進化論など学際的な視点から捉えた心理療法についてもご講義いただき、幅広い観点からご指導をいただいています。11月には、「芸術と心理療法における愛・意味・美」と題した公開講座を開催する予定となっており、すでに多くの方から申込みを頂いています。

また東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、震災に関連して関西圏に避難・移住されてきた子育て世帯への支援活動を継続して行っています。今年度は5月中旬に、農学研究科のご協力のもと「京大農場・果樹園ツアー」を開催し、さらに12月には「ツリー・ハウスをつくらう & 和・話・輪の会」を予定しております。震災から時間が経つにつれ、参加者それぞれが抱えておられる困難の形も個別化してきている状況がありますが、これまでの参加者同士のつながり、スタッフとのつながりを大切にしながら、新たなつながりの輪を作っていく機会としていきたいと考えております。

## 教育実践コラボレーション・センターから

### これまでの歩みとこれから

臨床心理学講座 教授/教育実践コラボレーション・センター長 桑原 知子



平成19年度から「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」が立ち上げられ、教育実践コラボレーション・センターとして、さまざまな活動をおこなってまいりました。その後、「事業」としての期間は完了しましたが、日常的な実践として、現在もその活動を続けております。

その中では、他の機関や学校との連携(コラボレーション)を進めてまいりました。また、高大連携や、さまざまな学校をフィールドとした活動も盛んです。こうした活動には学生も関わり、従来にはない教育実践がおこなわれていることから、教育的意義も高いものと思われま

平成25年度には、「学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究」という研究課題が「基盤研究(A)」に採択され、この課題に取り組むこととなりました。

不登校、学級崩壊、いじめなど、学校現場における様々な「問題」について、学校教育の秩序から逸脱した人や状態をどのように秩序の中に回収するのかということが考えられてきました。しかし、学校だけではな

く、地域・社会、家庭においても、「これまでの秩序にもとせばいい」という発想ではうまくいかなくなっているのではないのでしょうか？そこで、この研究課題においては、どのような秩序が動的に、新たに立ち上がってくるのかということを探究しようと考えました。

答えは、「一つ」ではありません。コラボのかたちは一つではなく、また、その本質は、日々の取り組みという「プロセス」のなかにあるように思います。

これは、華々しい「成果」とはいえず、「エビデンス」を明確にするような取り組みではないかもしれません。しかし、コラボレーション・センターがこれまで取り組んできた実践は人間の営みに添ったものであり、そこで培ってきた様々な「関係」(絆)は、なによりの財産であるように思います。

コラボレーション・センターの活動を支えていただいている教員・事務の方々および院生さんたちに心より感謝するとともに、今後のさらなるご協力とご支援をお願いいたします。

## グローバル教育展開オフィスから



グローバル教育展開オフィス室長 高山 敬太

グローバル教育展開オフィスでは、「日本型教育」とされるものの理念の構築を大きなプロジェクトとして掲げてきました。現在、このプロジェクトの一環として、日本語で書かれた研究論文を英語に翻訳して、海外の教育研究者に向けた基礎資料の作成にとりかかっています。多くの先生方に推薦していただいた各専門分野における代表的な論文をどのような形で組み合わせることで、一貫性のある資料を編むことができるのか、試行錯誤が続いていますが、ようやく何らかの方向性が見えてきたという段階です。



ある意味「独特な」日本の教育研究の文脈で書かれた論文を国外にて有意義な形で提示するには、どのような方向付けと意味付けが必要なのか。これはよく指摘されることですが、日本語での研究文脈と英語圏のそれとの間には一定

の「ずれ」が存在します。この「ずれ」が、日本の教育研究の独自性を担保しているとも言えますが、同時に国際的に発信する際には、飛び越えなければならないハードルにもなります。国内の状況を色濃く反映した論文を海外での議論に位置付け直すという作業、これは手間のかかる作業ですが、この作業を蔑るにすると、英訳されて国際的に発表された従来の日本語論文がそうであったように、それらは「日本独特の例外的事例」として片づけられてしまいます。より「普遍性」を持った教育議論に絡みつつ、同時の日本の教育研究の独自性を生かすにはどのような編集方針が必要とされるのか、そんなことを悶々と考えながら日々プロジェクトを進めています。日本の教育研究は海外における研究成果を輸入することが多く、その逆に国内で培われた研究蓄積を積極的に外に展開することは、一部の例外的な研究者を除いて、ほとんど行われてきませんでした。私は当研究科に赴任してまだ半年と日は浅いですが、多くの先生方の研究に触れる中で、この京都から国際的に発信することの意義を強く感じるに至りました。本年度中には海外の出版社との交渉を始め、来年度中の出版を目指しています。なお、11月1日には高松礼奈さんが助教として当オフィスに加わりました。これからは4人体制で全事業に邁進していきます。

## トピックス

### 「日本型」教育文化・知の継承支援モデルの構築と展開プロジェクト・支援モデル2



教育・人間科学講座 教授 鈴木 晶子

文明史からすると、人間は道具の発明を通して、環境に働きかけ、世界を構築してきました。環境世界との間に文明といういわば装置を介在させることで、人間はその世代で開発し蓄積してきた様々な知見を直接、次代に継承してきたといえます。このような文明継承の装置の一つとしての「日本型」を抽出するべく、支援モデル2は、教育ネットワークとしての教育文化に着目し、地域の繋がりや文化のなかで継承されてきた知の蓄積・継承過程を解明し、新たな技術や文化創出の担い手としての人間に求められる技能や能力を、教育文化の醸成という観点から分析し、新たな学習支援モデルを構築することを目指しています。

2019年度の課題は次の3つにまとめることができます。

1. 子どもの生活圏におけるコミュニケーションの変化に伴い、知情意、身体にどのような変化が生じているかを解明します。具体的には、①学習方略におけるダイアグラムの効用や記憶・想起の作用、身体

技法(ヨガ、瞑想等)を通じた意識や身体の変容の解明、②日本型教育モデルの検証をはじめ、学校におけるカリキュラムの改善や、日本的な信頼に根ざした学習支援の検討、③学校生活を通して刻まれていく記憶のもたらす人間形成的作用の解明です。

2. 日常生活のなかで身につく実践知や身体知については、学校教育を念頭に置いた学習研究では、これまであまり論じられてきませんでした。こうした文化学習における暗黙知の動きに注目し、会得や熟達を手掛かりにした新たな学習論を探究します。

3. AIやIoTなど新たな技術の進展とその社会実装によって生じる大きな変化によって、求められる知識や技能、リテラシー、学習方法や内容はどう変わるのかを検討します。

プロジェクトを通して、近代学校教育を下支えしてきた様々な智慧にも光を当てることができたらと考えています。

## 2019年度E.FORUM「全国スクールリーダー育成研修」

教育・人間科学講座 教授 西岡 加名恵



E.FORUMでは、2019年8月17日(土)・18日(日)の2日間にわたり吉田南キャンパス人間・環境学研究科地下大講義室において「スクールリーダー育成のための基礎講座」を開催しました。宮城県から宮崎県まで、計133名(1日目98名、2日目109名)の教職員や教育委員会関係者などが参加してくださり、とても活気のある会となりました。

1日目の午前は、楠見孝副研究科長の挨拶に続き、ワークショップ「若い教師に伝えたい授業づくりの発想」(石井英真准教授)が行われました。午後の前半は、ワークショップ「カリキュラム・マネジメントとの向き合い方」(服部憲児准教授)、その後、桑原知子教授による講演「『チーム学校』時代の心の教育」が行われました。

2日目は、ワークショップ「パフォーマンス評価入門——教科教育を中心に」(西岡加名恵教授)を行い、一部、「教科におけるパフォーマンス課題の実践」(講師:北原琢也特任教授・田中容子特任教授)、「学校課題を解決するマネジメント」(講師:盛永俊弘特任教授)をテーマとした

グループに分かれて議論を深めました。

また今年度からの新しい試みとして、高等教育研究開発推進センターご協力のもと、京大オリジナル株式会社との連携により、京都大学での研修への参加が難しい方を対象としたオンラインコース「教育評価の基礎講座」、ならびにさらに深い内容をご希望の方を対象としたブレンディッドコース「実践づくりフォローアップ講習」を開設しました。前者は、オンラインによる講義の視聴とミニテスト、後者はオンラインによる学習に加えてオンキャンパスでの実践交流会から構成されています。

E.FORUMでは、できる限り多くの皆さまに参加していただけるよう工夫しつつ、引き続き実践に役立つ知見を得られる、楽しくて元気の出る研修を提供していきたいと考えております。今後ともご支援のほど、よろしくお願いたします。

※E.FORUMの活動については、下記をご覧ください。

<https://e-forum.educ.kyoto-u.ac.jp/>



## 図書室から

### 書庫のお世話

図書掛長 美濃部 朋子

図書室の仕事には、貸出・返却、レファレンスサービス、選書、図書の受入・目録(今この2つは共通事務部担当)、装備、配架、蔵書点検などがありますが、それ以外に書庫のお世話(管理)ということもしています。

京大の図書館室の書庫は地下にあることが多く、教育学部図書室も閲覧室を含め書庫が地下にあります。雨が多い日本では、地下は湿度が高く、台風などによる浸水被害も起こりやすいため、図書をカビや水害から守るため、地下の書庫のお世話は大切な仕事です。毎朝、書庫に水漏れや虫の痕跡がないかを確認し、閉室時には散開作業(集密書架の区画ごとにボタンを押すと自動で書架が等間隔に開きます。そのおかげで湿った空気が滞留せず、カビの発生を防ぐ効果があります)を行います。雨の日は特に湿度が60%以上にならないように8台の除湿機の設定に気を配り、台風が来る前には書庫の外側のドライエリアの排水口に落ち葉が詰まっていないか確認して、浸水被害に備えます。休室日

には床と除湿機フィルターの清掃を掃除機で行い、書庫3か所に設置している温湿度計の1ヶ月分のデータを記録して職員で情報共有します。また日頃から図書だけでなく書架の棚も清掃するなど、書庫のお世話には時間も気も遣います。幸いにも教育学部図書室の地下は耐震工事で整備されたのち、集密電動書架の基盤交換工事も昨年度に完了し、除湿機もドライエリアの排水も異状なく作動しており、現在書庫の環境は良好です。

最近ではゲリラ豪雨が各地で起こっており、今年7月の豪雨では教育学部のドライエリアに面する書庫のドアの下、数センチまで雨水が来てヒヤヒヤしましたが、もう少しというところで雨が止み浸水せず助かりました。今後も、もしものために準備した吸水スポンジの出番が無いことを願っています。

# 令和元年度教育学研究科長賞

学生表彰選考委員会委員長・研究科長 稲垣 恭子

このたび、令和元年度京都大学大学院教育学研究科長賞の選考の結果、教育学専攻教育認知心理学講座博士後期課程3年の平岡大樹さんと教育学環専攻教育方法学・発達科学コース博士後期課程2年の松永倫子さんが、受賞者に選ばれました。誠にありがとうございます。

この賞は平成24年度に創設され、(1)学業、(2)課外活動、(3)社会活動などの分野で優れた成果を上げ本部局の名誉を高めた学生、(4)その他、本表彰に相応しいと認めた学生に対して賞を授与するものです。本研究科・学部の教職員および学生であればいつでも推薦することができます。8回目を迎えた今年度は、推薦期日の令和元年9月27日までに、計2名の推薦がありました。以下、選考経過と選考理由を簡単にご報告します。

まず、学生表彰選考委員会(委員は稲垣恭子研究科長、楠見孝副研究科長、矢野智司副研究科長、齊藤智教務委員長、杉本均学生委員長)において、推薦を受けた候補者について慎重に協議・検討しました。その結果、平岡さんと松永さんを受賞にふさわしい成果を有すると判断し、研究科長賞受賞者として決定しました。

平岡大樹さんは、国内外で大きな社会問題となっている児童虐待に関心を寄せ、そのメカニズムについて、心理学を基盤としながら人間の生体に関わる分子生物学や神経内分泌学を融合した学際アプローチにより優れた研究知見を修得されました。国際的な研究者間の交流にも積極的に参加、成果発信に努め、心理

学・神経内分泌学の融合領域におけるトップジャーナル Psychoneuroendocrinology誌を含め、査読付国際学術誌に計6報掲載されており、学業の観点から本研究科の名誉を高めることに大きく貢献されました。

松永倫子さんは、育児中の母親と乳児に特異的に生じる心身の特性を、オキシトシンなどの内分泌や心拍変動などの身体生理反応と、行動表現型の双方から多面的に検証しています。分子生物学や医学、認知科学を融合させた独創的な研究手法により、これまでに、国際誌への掲載・投稿、国際シンポジウムでの招待講演のほか、基礎研究成果の社会実装(幼児のトイレトレーニングを支援するアプリケーションの開発に携わり、4件の特許取得と第11回キッズデザイン賞受賞)等の産学連携研究による社会貢献に取り組み、優れた評価を受け、本研究科の名誉を高めることに大きく貢献されました。

両氏が今回の受賞を機にさらなる精進につとめ、教育学の発展に寄与・貢献されますようお祈りいたします。



## 研究科長賞



博士後期課程3年  
平岡 大樹

この度は京都大学教育学研究科研究科長賞という栄誉ある賞をいただき、誠にありがとうございます。今回の賞はこれまでこの研究科で行ってきた一連の研究に対していただいたものですが、ひとえにこの教育学部・教育学研究科の環境あってこそそのものだと思っています。学部時代から教育学部で学び、現所属の認知心理学のみならず臨床心理学や発達科学、教育学等の異なる領域の専門授業を受けることができ、様々なアプローチから「人」を理解し支援しようとする姿勢を学びました。私の研究は「乳児の音声に対する養育者の反応」というテーマですが、このテーマに至った問題意識の形成には、そうした学部時代の経験によるところが大きいと感じます。そして大学院に上がったからは、より深い専門性の中で優秀な先生方、院生方から常に刺激を受け、研究を進めることができました。認知心理学の分野の中でも各自の問題意識やアプローチは多種多様で、狭い視野にとらわれず研究を行えたのではないかと感じています。改めて、その環境を作ってくれた皆様に感謝を申し上げます。

今後ともこの賞に恥じる事が無いよう、研究活動を行っていききたいと思います。

## 研究科長賞



博士後期課程2年  
松永 倫子

このたびは、研究科長賞という名誉ある賞を賜り、心より感謝申し上げます。ご指導いただいている先生方、研究室や共同研究先の皆様、調査にご協力くださる赤ちゃん研究員の皆様など、日々多くの方に支えられています。改めて皆様に厚く御礼申し上げます。指導教官の明和先生には、「何ができるかではなく、やりたいことを考えなさい」とご指導いただきました。実際に、研究分野、実験手法、基礎研究/社会実装など、あらゆる枠にとらわれずに多様な観点や方法を用いて研究に取り組み、挑戦させていただいています。国内外で最先端の研究を肌で感じながら基礎研究にとり組むと同時に、難しさを感じながらも研究と社会との接点を考えることを忘れずに研究を進めさせていただいていることは、私にとって大きな喜びであり励みとなっています。業績数はじめ研究者として未熟な点多々ありますが、このたびの受賞は私にとって、このまま自分らしく研究を進めていくなさいと背中を押してもらったように感じています。ヒトの心と身体は、いつからどのように他者との関わりの中で発達していくのか、その本質に迫るような研究を一步步積み重ねていきたいと思います。

## オープンキャンパス2019

令和元年8月8日(木)、9日(金)の両日、「京都大学オープンキャンパス2019」が開催された。

本学部においては、8月9日(金)12時30分から実施し、452名の参加者があった。

当日は、矢野智司副研究科長による歓迎の挨拶後、佐野真由子

広報委員長による進行のもと、石井英真准教授、松下姫歌准教授による模擬授業、各系の説明と質疑応答が行われた。また、13時から16時まで、学生相談員が個別相談にあたり、高校生からの相談に親身に応じていた。

参加者は熱心に耳を傾けており、本年も盛況を収めた。



## 大学院・学部学士入学 入試説明会

令和元年6月23日(日)京都大学吉田キャンパスにおいて、令和元年7月13日(土)京都大学東京オフィス(丸の内)において大学院及び学部学士入学入試説明会が開催された。

吉田キャンパスでは、13時から齊藤智教務委員長による歓迎のあいさつの後、入試ガイダンスが行われ、関係教員や大学院学生による個別相談が実施された。

東京オフィスでは、14時から齊藤智教務委員長による歓迎のあいさつの後、明和政子教授によるオープニングレクチャー「ヒトの脳と心の発達を科学的にとらえる」、入試ガイダンス及び個別相談が実施された。

いずれの会場でも、受験希望者が熱意を持って参加していた。



# 諸記録

## 主な出来事(H31.4.1~R1.10.31)

- 
- 4月** 19日(金) 高大連携:特別授業  
「**実習を通して学ぶ臨床心理学**」(講師:桑原知子教授)  
(対象:滋賀県立膳所高等学校)
- 
- 5月** 19日(日) こころの支援室  
「**京大農場・果樹園ツアー**」  
(農学研究科附属農場)  
23日(木) 教育認知心理学講座  
Robert LOGIE教授講演会  
「**Common Principles and Individual Variation in Human Cognition**」  
(教育学部本館)
- 
- 6月** 4日(火) 経営管理大学院・教育学研究科 ジョイント・セミナー  
「**次世代に求められる「知」～経営と教育の接点～**」  
(百周年時計台記念館)  
6月4(火)-7月16日(火) 教育学部創立七十周年記念展示  
「**京都大学教育学部の70年とこれからの挑戦**」  
(百周年時計台記念館 歴史展示室内企画展示)  
7日(金) 高大連携:特別授業  
「**記憶について**」(講師:楠見孝教授)  
(対象:滋賀県立膳所高等学校)  
13日(木) レクチャーシリーズ第2回ディクリシオ恵美氏講演会  
「**アメリカにおける児童福祉実務の最前線—虐待や犯罪被害からの保護を中心に**」  
(教育学部本館)  
30日(日) 教育学部創立70周年記念式典  
教育学部創立70周年記念講演会(講師:竹内洋京都大学名誉教授)  
「**私説・京都大学論—「非」体制というダンディズム**」  
(百周年時計台記念館)
- 
- 8月** 17日(土)-8月18日(日) 教育実践コラボレーションセンター  
E.FORUM全国スクールリーダー育成研修  
(人間・環境学研究科地下大講堂室)  
18日(日) 附属臨床教育実践研究センター  
第23回リカレント教育講座「**『心の教育』を考える—多職種・多機関の連携—**」  
(百周年時計台記念館)
- 
- 9月** 25日(水) 高大連携:SGH課題研究セミナー  
(対象:福岡県立京都高等学校)
- 
- 10月** 17日(木) 教育認知心理学講座  
Alexander Soemer氏講演会  
「**Task-unrelated thoughts and performance in memory-related tasks**」  
(教育学部本館)  
19日(土) E.FORUM実践づくりフォローアップ講習 実践交流会  
(総合研究2号館)  
27日(日) 附属臨床教育実践研究センター  
公開講座「**芸術と心理療法における愛・意味・美**」  
(京都テルサ)
-

## 人事異動(R1.5.1-R1.11.30)

令和元年6月1日

事務補佐員(臨床教育実践研究センター) 採用

令和元年6月16日

事務補佐員(地域連携教育研究推進ユニット) 採用

令和元年6月30日

派遣職員(総務掛) 任期満了

令和元年6月19日

派遣職員(総務掛) 採用

令和元年6月

教務・事務補佐員(地域連携教育推進連携ユニット) 退職

令和元年8月1日

教務・事務補佐員(地域連携教育推進連携ユニット) 採用

令和元年11月1日

高松 礼奈 助教(グローバル教育展開オフィス) 採用

## 外部資金受入れ(R1年度)

### ◎共同研究

研究題目	委託者	担当者
心的・生理的状态とその制御が生理・知覚・認知・情動応答に与える影響についての研究	日本電信電話株式会社	野村 理朗
会社組織としての好奇心に関する共同研究	キュリアスキャピタル株式会社	楠見 孝

### ◎寄附金

研究題目	寄附者	担当者
国際会議開催助成 「次世代の市民的社会参画～インドネシア・ソロ・フォーラム」	公益財団法人 京都大学教育研究振興財団	安藤 幸
研究活動推進助成 学びをつなぐ:学習効果を高める革新的教授・学習方法の解明と提案	公益財団法人 京都大学教育研究振興財団	MANALO Emmanuel
研究活動推進助成 力動的な理解に基づく心理療法の効果およびプロセス研究	公益財団法人 京都大学教育研究振興財団	桑原 知子
研究活動推進助成 統計的学習が支えるワーキングメモリ機能の総合的理解	公益財団法人 京都大学教育研究振興財団	齊藤 智

## 教育学研究科・教育学部基金(詳細はP12)

ご寄付いただきました方々への感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。  
(公開をご希望されない方については、掲載しておりません。)

高木 枝美子      廣瀬 直哉      那須 光章  
森本 洋介      辻村 政雄

(五十音順)

令和元年9月30日現在

新任教員紹介



高松 礼奈  
助教

11月に着任しました。知的好奇心を常に持ち、オフィスの仕事や研究に尽力したいと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

所属 グローバル教育展開オフィス  
専門 社会・文化心理学

訃報



上田 閑照 京都大学名誉教授

上田閑照先生は、令和元年6月28日逝去された。享年93歳。  
昭和24年京都大学文学部哲学科卒、昭和38年Ph.D.(マールブルク大学)、昭和51年文学博士(京都大学)。京都大学教養部助教授、教育学部助教授を経て昭和48年教授。昭和52年4月文学部哲学科教授へ配置換え、平成元年定年退官。  
京都大学名誉教授、花園大学客員教授(平成3年から平成11年まで)。平成15年日本学士院会員、平成30年文化功労者。  
禅研究、ドイツ中世神秘主義や西田幾多郎、西谷啓治等の京都学派思想に関する哲学研究において多くの業績を上げるとともに、日本宗教学会会長、日本学術会議会員、東西宗教交流学会会長など学会・学界の要職を歴任し、教育研究の発展に大きく貢献された。



坂野 登 京都大学名誉教授

坂野登先生は、令和元年9月2日に逝去された。享年85歳。  
昭和32年3月京都大学文学部卒、昭和38年3月に京都大学文学博士。株式会社日本リサーチセンター主任研究員、ドイツ民主共和国ライプツヒカルマルクス大学医学部臨床神経生理学研究室助手、大阪経済大学専任講師、助教授を経て、昭和45年京都大学教育学部助教授に採用、昭和59年教授。京都大学評議員、教育学部教育心理学科長を歴任し、平成9年定年退官。京都大学名誉教授。  
日本心理学会、日本教育心理学会、日本応用心理学会、関西心理学会の運営と発展に力を尽くされたほか、心理学の英文雑誌「Psychologia」の編集長を務められ、日本の心理学の国際化にも寄与された。

教育学研究科・教育学部基金

— 未来の教育を創造するため、人間・社会についての世界最先端の研究を展開し、  
成果の社会還元を行うとともに、学生の教育環境の整備に取り組みます —

本研究科・学部は、1949年の創設以来、世界最先端の教育学研究とその研究者の養成、ならびに全学の教職教育の責任部局という責務を担いながら、これまで各界で活躍する有為な人材を輩出し、優れた研究成果を現場に還元することで社会の要請に応じてきました。

本研究科・学部は、学校教育はもとより、地域、家庭、職場などが育っていくあらゆる場を「人間形成」の場として探究しています。その中で、不登校・学習意欲不振生徒のための学校改善、過疎地域の地域振興などへの提言、教育委員会の指導主事など第一線の実践現場で働く人びとにとっての研修の機会を提供しておりますが、このような活動は、大学院生が現場のリアルな問題に触れながら自らの研究関心と手法を研ぎすますための教育の場でもあります。

近年、社会と連携したこうした教育研究活動の必要性が増す状況において、本研究科・学部が社会と連携しながら実践的な教育・研究を行うためには、安定した財政基盤が必要です。その礎の一つとして、2015年に「教育学研究科・教育学部基金」を設立しました。本基金では、研究の成果を現場(フィールド)に返し、また現場での課題を教育・研究に

生かしていく、「理論と実践の往還型」の教育・研究という本研究科・学部の特色ある活動を維持するため、以下の活動に活用します。

皆さまのご協力をよろしくお願い申し上げます。

基金の使途:

項目	具体例
(1) 教育支援	・学生のための図書・教材等の購入 ・学生関係居室の整備・維持管理 ・障害学生等のための学習補助者の雇用 ・学生・院生の海外派遣 など
(2) 研究支援	・研究活動基盤整備の支援 ・研究・学術資料の整備 ・公開講座・講演会等の開催 など
(3) その他事業支援	・京都大学教育学研究科シリーズ本の出版補助 ・修了生・卒業生との連携活動 など

詳細については以下をご覧ください。

<http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/contribution/education/index.html>

編集後記



教育学研究科renewalから一年が経った。接頭辞のreは「再」という意味があるが、元を辿れば「もの」「こと」を指す。それは単なる物性でなく「授けられ、自らのものになった、大切なもの・財産」というニュアンスをもつ。つまり、与えられた生命や魂が主体をもち、社会的に財産(土地)をもち、主体的な生を営むこと等を含む語らしい。だから「re-al」。さらには、「隷属から自由になり、それを取り戻すこと」をも意味する。だから「再」。人生も、学問も、教育学研究科も、然りたし。魂の自由を大切に。(松下姫歌)

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

- 委員長 佐野真由子 教授 (教育社会学講座)
- 委員 稲垣 恭子 教授 (教育学研究科長・教育学部長)
- 委員 松下 姫歌 准教授 (連携教育学講座(附属臨床教育実践研究センター))
- 委員 石井 英真 准教授 (教育・人間科学講座)
- 委員 小西 博之 事務長
- 委員 鞠 尚子 総務掛長
- 委員 宇野 純子 教務掛長

事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛

TEL 075(753)3000

ホームページ <http://www.educ.kyoto-u.ac.jp>